墓 地 の 判 読

Interpretation of Area Good for Cemetery

尾 崎 幸 男*

Yukio Ozaki

写真判読については種々報告や論文も出されているが、いずれも専門的な内容のものが多くようなので、時節外れながら肩のこらない墓場さがしの話を紹介したい。

〈その 1〉

デルフトの ITC を訪ねられた方はご存知の筈だがデルフト駅から ITC に行く運河沿いの道の右側に 1 部こんもりとした小高い緑地がある。これが実は墓地であって、空堀に囲まれて一見小公園のように見える。

ところでヨーロッパでは土葬の習慣がかなり残っているそうであるが、都市計画等のための墓地移転等で新しい墓地をさがす時にこれが問題になるとのことである。限られた墓地にあとからあとからと新しい埋葬をする以上、いずれは前に埋めた場所へもまた埋めなければならなくなる。その時に以前の遺体が出て来るようでは困る。従って適当な期間で遺体が分解して

土に帰るような土地でないと土葬用の墓地としては適当でない。このための条件の 1 つとして地下水位が埋葬の深さよりも深く、遺体が水浸けにならないことが必要である。これは遺体が空気にふれて次第に酸化分解して行く状態でなければならないからであるが、一方あまり酸化が早く進んでも困る。

それで結局地上水位が一定の深度でなければならないことになる。この地下水位の深度を地表の写真の状態（作物の種類、樹木の成育状況、土の色や濃度等）から判定して候補地を探すのだそうである。勿論写真判読だけで水位を正確に知ることはできないので、判読によって候補地をえらび出した上、現地でボーリング等によってさらにくわしく調査し、最終的な決定を下すのである。

これ以上あまりくわしく聞けなかったのは残念である。日本でも墓地の選定等に今後このようにして写真判読を利用することが考えられる。

* 国土地理院 写真測量 VOL. 5 No. 2 1966年

第1図 多摩霊園

縮尺約 1/10,000

〈そのⅡ〉

縦貫自動車道の写真地図を作る場合、墓地や祠等はなるべく詳しく入れたいとの注文を受けた。墓は文字通り墳墓の地であり、神社や祠のような信仰の対象と共に補償や撤去・移転の際に特別の配慮が必要だからである。

これが機縁となって筆者は墓地判読に関心を持つようになり、今ではひそかに墓地さがしのオーソリティを以て任じているが、果して実際の役に立つかどうかは疑問である。だが写真地質や森林判読とちがって墓地学の専門家というのは多分いないと思われるので勝手にオーソリティと自称しているだけであるが、あえて墓地判読の大略をのべると次のようにもなるうか。

まず写真縮尺は1/2万～1/1万程度がのぞましい。1/2万以下では墓地発見は飛躍的に困難になるように思われる。

最後のきめ手は実体視である。1/1万～1/2万の写真では個々の墓石を確実に見ることはできないが、針尖か羽毛の屑のように見える微小な墓石がチカチカと光っているような感じを受ける。墓石が十数個以上群をなしている場合はかなり高い確率で墓地を発見することができるが、数個以下の場合は相当難しい。また多摩霊園（第1図、第2図）のように大きいものは公園のようにも見えるが、内部の道路配置や実体視によって簡単に公園と区別することができる。

第1図の実体空中写真と第2図の斜め写真とを比較

しながらよく確かめられたい。

しかし小さい墓地の発見はかなり困難なのでまず墓地のありそうな個所の見当をつけて、それから実体視によって判読して行く方が有効であろう。

この見当をつけるのは常識的な推理による他はない。即ち

- A 人間の住んでいるかぎり埋葬の必要性が生ずる
- B 遠くに埋葬することは困難だが、逆に部落の真中に埋葬することもない
- C 従って部落の周辺乃至少し離れた所に埋葬地が必ずある筈である。

このことは「野辺の送り」という諺の通りであって

第2図 多摩霊園

斜め写真

第1図 多摩霊園

縮尺 約1/10,000

なお次のようなことがらがキーとして判読の助けになる。

- (1) 火葬の習慣の地方では墓地の一隅に必ず火葬場がある。従って部落外に一劃の草地在ってその一隅に小建築物が1軒ある場合、墓地である公算が大きい。(第6図参照)
- (2) 墓地の大きさは部落の大きさや古さと相関がある。しかし墓地は一部落に一個所とは限らないから注意を要する。逆に大きい部落周辺で小さい墓地を一つ発見した場合は、他にもないかと一応探して見るべきであろう。
- (3) 墓地に利用されるのは農地として不適当な箇所例えば山腹や河原近くのことが多いが、概して低地よりは小高い場所に多い。
- (4) 墓地の近くには寺があることが多い。あるいは寺の近くに墓地があるといった方がむしろ適切かも知れないが。
- (5) 墓地は「方位」に関する信仰から部落の北方乃至東北方向にあることが多い。

このようにしてまず広範囲の探索区域から予備知識や資料によって可能性のある地区をしぼり、さらにくわしく判読して行く。これはもっと複雑な各種の判読のプロセスの模型とも言え判読の小手調べ、あるいは判読実習としては手頃な課題ではないかと考えられ

る。最初は地図上で墓地をさがし、その位置を空中写真上で確認するか、あるいは既に現地を見て知っている墓地を写真上で見つけることから始めるのが順序であろう。

第3図と第4図は墓地写真の例で、第5図は第4図の墓地の地上写真である。第1図、第2図の場合と同様に比較参照されたい。第6図は小墓地(火葬小屋を伴う)の例である。

これらの墓地の写真は実体写真対としてあるが、印刷の際網版をかけるので実体視して果してどの程度まで墓石が判読できるか疑問である。機会があれば印刷していないままの密着写真あるいは引伸写真によって実体感を確かめていただきたい。

ここに例としてあげたのは大きい墓地が多いが、小さい墓地は判読が困難なうえ、上述のように、印刷の網版のせいもあって、判読できるかどうか疑わしい。これも折があれば実際の写真について確かめられたい。

ここでは第6図が小墓地の例であるが、この写真の中央附近の小屋が火葬小屋で、火葬小屋を含む一割が墓地である。原写真上でも判読は非常に困難であったが、1/5万地形図上の墓地記号から火葬小屋をキーとして写真上で確認できた例である。

第3図 墓地(川崎市溝ノ口)

縮尺 1/10,000

第6図 小墓地(一宮付近)

縮尺約 1/15000 (原縮尺約 1/20,000)

第5図 墓地(仙台市)
地上写真

第4図 墓地(仙台市)

縮尺約 1/18,000

〈写真測量関係の単行本〉(1)

会員から時折照会があるので、講座ものも加え年代順にまとめ、『うめぐさ』とした。落ち、誤り等あれば御一報されたい。(中村貢治調)

*

1. 鈴木猶吉著 『写真測量』 昭和6年
岩波書店 『岩波講座地理学』
2. 石井英橋著 『地籍測量』 昭和9年
岩波書店
3. 丹波長道著 『航空写真』 昭和10年
木本氏房著 『写真測量』
誠文堂新光社 『最新写真科学大系』
4. 林 猛雄著 『航空写真測量』 昭和10年
シビル社 再刊コロナ社
5. 丹波長道著 『航空写真』 昭和12年
共立社 『写真科学講座』
6. シュヴェイデフスキー著・武田通治訳 『空中地上写真測量』 昭和14年
古今書院
7. 木本氏房著 『航空写真測量』 昭和16年
満州航空株式会社
8. 理研科学映画編輯 『空中写真測量』 昭和17年
科学主義工業社
9. 木本氏房著 『航空測量』 昭和20年
白水社 『科学選書』
10. 篠 邦彦著 『写真測量法概論』 昭和23年
旧日本写真測量学会
11. 武田通治著 『空中写真測量の手引』 昭和24年
旧日本写真測量学会
12. 佐藤 久著 『空中写真による土地調査と写真判読』 昭和25年
旧日本写真測量学会
13. 武田通治著 『写真測量』 昭和26年
オーム社 『測量技術講座』
14. 武田通治著 『図解射線法の実際』 昭和28年
旧日本写真測量学会 再刊日本測量協会
15. 木本氏房著 『航空写真測量』 昭和32年
日本林業技術協会
16. フォン・ラーエル著・戸部厚滋訳 『森林写真測量概要』 昭和32年
日本林業技術協会
17. 日林協測量指導部編 『空中写真測量基準カード』 昭和34年
日本林業技術協会
18. 片岡秀夫著 『近代的森林調査法の実務』 昭和34年
日本林業調査会
19. 木本氏房著 『航空写真測量の実際』 昭和34年
日本測量協会
20. 尾崎幸男著 『写真測量』 昭和34年
森北出版社 『測量実務叢書』
21. 日林協測量指導部編 『空中写真判読比較カード』 昭和35年
日本林業技術協会
22. 高橋三郎・森本久弥著 『写真測量と地図編集の問題』 昭和36年
日本測量協会